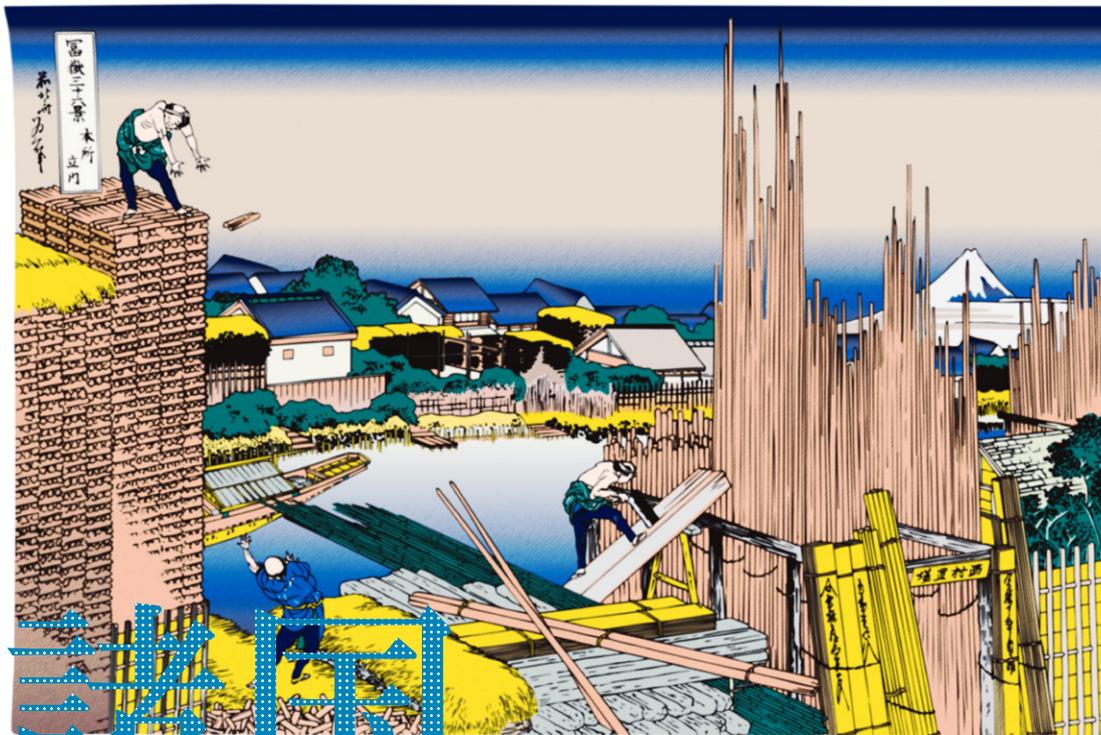




日本の知恵、
プラスチックの知恵

建設ラッシュで目覚めた、江戸の環境問題



諸国 山川掟

しよこさんせんおきて



ビオトープ いこ もり 憩いの杜

徳川家康が幕藩体制を敷き、約300年という長寿政権を誇った江戸時代は、農業や産業の技術も向上し、物流も目覚ましく発達しました。江戸城を中心に、武士と商人や職人などの町人が暮らす、超過密で巨大な首都を形成していました。江戸市中では、1650年頃には、建設資材の材木の入手や人々が出すゴミを巡って、環境に関心が集まり始めました。森林伐採などの乱開発に歯止めをかけるため、1666(寛文6)年に小田原城主の稲葉美濃守正則ら4人の老中が提案した「諸国山川掟」は、環境問題対策のひとつ。江戸時代にも、都市開発や産業の繁栄とともに、自然界とのバランスを考える人たちがいたのです。

科学技術の進歩の針を前に進めるだけではなく、自然界という生態系の中で、人と自然の調和を図るために始まったのがビオトープ。住友ベークライトの静岡工場の敷地内に設けられた「ビオトープ憩いの杜」は、2017年4月に一般公開が始まりました。企業が取り組む生物多様性保全の一環として設営されたもので、動植物と人が共生できる杜として、数多くの来園者を迎えています。

